

# 村上春樹

分身との戯れ



酒井英行

*sakai hideyuki*

翰林書房

# 村上春樹

分身との戯れ

江苏工业学院图书馆

藏书章

酒井英行

sakai hideyuki

翰林書房

酒井英行 (さかい・ひでゆき)

一九四九年 岡山県に生まれる。

一九七六年 早稲田大学大学院文学研究科 (日本文学専攻) 修士課程修了

現 在 静岡大学 (人文学部) 教授

著書に、「漱石 その陰翳」(有精堂、一九九〇・四)、「芥川龍之介 作品

の迷路」(有精堂、一九九三・七)、「内田百閒〈百鬼〉の愉楽」(有精堂、

一九九三・九)、「百閒 愛の歩み・文学の歩み」(有精堂、一九九五・一

〇)、「宮本輝論」(翰林書房、一九九八・九)がある。

村上春樹 分身との戯れ

二〇〇一年四月四日

第一刷

著者 酒井英行 ©

発行者 今井 肇

発行所 株式会社翰林書房

〒101-0061 東京都千代田区神田神保町一―四六

電話 (〇三) 三三九四 ― 〇五八八

印刷・製本 アジプロ

Printed in Japan. ISBN4-87737-129-X C0039



村上春樹 分身との戯れ◎目次

I 他者との出会い／自己との出会い

『午後の最後の芝生』——へただ単にへへするのが好き～なだけ？の「僕」—— 6

『土の中の彼女の小さな犬』—— 27

『めくらやなぎと眠る女』——記憶の再生／自己の再生—— 58

II 「回転木馬のデッド・ヒート」の諸相

1 『レーダーホーゼン』——へばしたり縮めたり～され続けてきた自我 90

2 『タクシーに乗った男』——夢の終わり／人生の始まり 101

3 『プールサイド』——スポーツ／人生 111

4 『今は亡き王女のための』——損傷を受けたエゴ 125

5 「嘔吐1979」——関係性の飢餓に瀕した男 135

6 「雨やどり」——性生活の経済的側面／経済生活の性的側面 145

7 「野球場」——〈嫌な匂いのする汗〉 155

8 「ハンティング・ナイフ」——〈自分のナイフ〉 168

### Ⅲ 分身との戯れ

「納屋を焼く」——〈蜜柑むき〉の位相—— 188

「ファミリー・アフエア」——分身との戯れ—— 217

\*

あとがき 243

初出一覧 245



I

他者との出会い／自己との出会い



『午後の最後の芝生』——へただ単にへするのが好きなだけ？の「僕」——

自分の心の苦痛を声高には語らない、『午後の最後の芝生』（『中国行きのスロウ・ボート』一九八三年五月 中央公論社刊 所収作品）の主人公の「僕」。自己の心の重荷など他人に話すべきではない、という、成熟した人間の自己抑制によるものではあるまい。自己の心の重荷を他人に話しても始まらない、といった白けた心性からでもないであろう。「僕」は自己の心の内奥を他人に話せないのであろう。それを打ち明けることが出来るほど濃密な人間関係を結べていないから、と言い換えてもいいであろう。

語られている「僕」、この短編小説の物語内容を形成する「僕」は、十八、九歳の大学生の「僕」である。語っている現在の「僕」は、そのときから十四、五年経った、小説を「商品」として書いている「僕」である。十四、五年前の「僕」を語り出そうとするとき、十四、五年前が「けっこう昔」か、そうでもないか、を問題にしつつ、「十四、五年前といえば、僕が芝生を刈っていたころじゃな

いか。」というぐあいには、芝生を刈っていた「僕」を中心化していくのである。この作品の物語内容が「僕」の芝刈りであるから、それは当然のことと言えよう。作品の題名が指示している物語内容に近接していく仕掛けであることは間違いないが、しかし、それだけではあるまい。大学生の「僕」は当然のことであるが、様々なことをして生きていたはずである。恋人と会ったり、講義を受けたり、映画を見たり、……。 「僕」の芝生を刈るといふ行為だけがそれらから分離され特権化して語られているのである。「僕」の芝生を刈る行為は、「僕」の存在様態の核心を現わす行為なのである。「僕」はなぜ芝生を刈るのか、芝生を刈る「僕」とはどのような「僕」なのか。

大学の学生課で見付けた芝刈りのアルバイト。

僕の他にも何人か一緒に入った連中もいたが、みんなすぐにやめてしまつて、僕だけが残つた。仕事はきつかつたが、給料は悪くなかつた。それにあまり他人と口をきかなくて済む。僕向きだ。仕事はきついが、給料は悪くないアルバイトは他にいくらでもあるだろう。「夏に恋人とどこかに旅行するための資金」を稼ぐためとはいえ、「みんなすぐにやめてしま」う仕事に「僕」が堪えられたのは、それが「僕向き」の仕事だったから、つまり、「あまり他人と口をきかなくて済む」仕事だったからである。「僕」の心の根源的なものが見え隠れしていることは間違いないであろう。現実を生きていく違和感、関係性の違和感をさりげなく吐露しているのである。

芝刈り会社の社長が、「あんたはほんとうにとてもよくやつてくれたよ」、「お得意先の評判もいいしな」と言い、「僕」もそれを、「実際に僕はすごく評判がよかつた。丁寧な仕事をしたせいだ」と、

おうむ返的に自己認定している。「僕」の芝刈りの丁寧さは、自他ともに認める仕事振りなのだ。

僕はべつに評判を良くするためにこんなに丁寧な仕事をしたわけではない。信じてもらえないかもしれないけれど、ただ単に芝生を刈るのが好きだったのだ。

「僕」が丁寧に芝生を刈る理由になつているのであるか。「評判を良くするため」ではないというのだが、それならば何のために丁寧に刈るといふのだろうか。「芝生を刈るのが好き」というのは、必ずしも、丁寧に刈る理由にはならないのである。好きだけれど、乱雑にする人もいるのだから。「僕」は、芝生を丁寧に刈る真の理由に口を閉ざし、そこを迂回して、感覚のレベルのこととして、「ただ単に芝生を刈るのが好きだったのだ」と語っているのである。理由なんて特にない、へただ単に好きだからそうしているだけだ。「僕」は投げ遣りな感覚人間のように見えるかも知れない。自己の行為に理性的な動機づけをして、現実のなかでその責任を引き受けることの出来ない人間のように見えるかも知れない。しかし、「僕」には丁寧に芝生を刈る理由がないわけではない。へただ単に丁寧に刈っているのではない。

適当にやろうと思えば適当にやれるし、きちんとやろうと思えばいくらでもきちんとやれる。

しかしきちんとやったからそれだけ評価されるかというと、そうとは限らない。ぐずぐずやっていると思われることもある。それでも前にも言ったように、かなり僕はきちんとやる。これは性格の問題だ。それからたぶんプライドの問題だ。

他者の評価という関係性の問題ではないのだ。いや、「僕」は他者との関係性の座標軸からずり落

ちているのかも知れない。他者の評価が抜け落ちた、自己評価だけが絶対化された自己閉塞的な世界にいるのかも知れない。自閉思考（非現実思考）に陥っているのだと考えられる。芝生の表面をきちんと整えることへの強い執着、それは他者との生きた関係の喪失の裏返しであるはずだ。「これは性格の問題だ。それからたぶんプライドの問題だ」と語る「僕」は、そのことにうすうす気づいているのである。たかが芝生の表面をきちんと刈ることにしかアイデンティティーを見いだせない孤独感、無力感、現実世界への違和感。「僕」はこの自己の心の核心部に真に向き合おうとしないのである。そこから目を背け、逃げだしたのである。自閉症的な心がきちんと芝生を刈らせていることを自覚しているながら、そのことから目を逸らすために、別に理由などない、へただ単に好きだからそうしているのだと言っているのである。

このような思考回路、行動パターンは、「僕」のなかで固定されていると言えよう。古株で、「仕事を最初を選ぶ権利がある」のに、実利的には損になる「なるべく遠くの仕事をとる」理由を「僕」は次のように語っている。

べつにたいした理由はない。遠くまで行くのが好きなのだ。遠くの庭で遠くの芝生を刈るのが好きなのだ。遠くの道の遠くの風景を眺めるのが好きなのだ。でもそんな風に説明したって、たぶん誰もわかってくれないだろう。

「誰もわかってくれない」、孤独な自己の世界での非現実思考。世間の実利的価値観と異なる幼児的、空想的な価値観への強い執着。世間の価値観とずれてしまう違和感、不安感を、「たぶん誰もわかつ

てくれないだろう」とそつと漏らすだけで、表向きには、「べつにたいした理由はない」、好みのレベルの問題に過ぎぬと語っているのである。

芝生をきちんと刈ること、遠くの仕事をあえて選ぶこと、そのような自己完結する事柄に関しては、別に理由はない、へそうするのが好きなのだ、と心の中心的な課題から目を逸らすのは彼の自由であり、彼の権利であると言ふべきかも知れない。急ぐべき真の解決を先送りして、心の成長を遅らせるだけであるから。

芝生を刈っていた頃の「僕」には、「おないどしの恋人」がいたのである。「セックスをしたり、映画をみたり、わりに贅沢な食事をしたり、次から次へととりとめのない話をしたりした」のである。しかし、その恋人とは、へ午後の最後の芝生を刈る少し前に別れたのだ。いや、別れた、終わった、と「僕」が勝手に思っているだけだ、と言ふべきかも知れない。

ある夏の朝、七月の始め、恋人から長い手紙が届いて、そこには僕と別れたいと書いてあった。あなたのことはずっと好きだし、今でも好きだし、これからも……云々。

別れたいという「彼女」の意思表示に、「僕」はどのように応えたのか。「彼女」との現実的な関係においては、何ひとつ応えていないと言ふ他ないのだ。「彼女」を引き止めたのならその意思を、別に同意するのならその意思を、とにかく自分の気持ちをも、「彼女」に伝えるべきであろう。「僕」は手紙を書きもしないし、電話するのでもなく、会いに行くこともしないのである。「彼女」との関係のなかで、「彼女」に向かつて何ひとつ応えないまま、別れたのだと勝手に決めているのである。相

手の自由を尊重しようとする、成熟した人間のおおらかな配慮からではない。「彼女」に向かつて、何故、するのが当然の意思表明、感情表明をしないのであろうか。その検討をする前に、「恋人からの長い手紙」というその手紙の別の箇所を、「僕」が語りのなかで引用する範囲で見ておく必要があるだろう。

「やさしくてとても立派な人だと思っています。でもある時、それだけじゃ足りないんじゃないかという気がしたんです。どうしてそんな風に思ったのか私にもわかりません。それにひどい言い方だと思っています。たぶん何の説明にもならないでしょう。」

「あなたは私にいろんなものを求めているのでしようけれど」

「私は自分が何かを求められているとはどうしても思えないのです」

「やさしくて立派な」だけでは足りない、「自分が何かを求められているとはどうしても思えない」、「彼女」の別れた理由は明確に説明されているのだ。一方通行的な、「僕」のなかで自己完結してしまふ関わり方に不安感、不満感を表明しているのだ。「べつにたいした理由はない」、へただ単に×そうするのが好き」なだけだ、という「僕」の人生態度に向けられた不安感、不満感とも重なるであろう。この手紙を受け取った「僕」が「彼女」に対して何も応えなかったことは既に述べた。「僕」が「僕」だけの世界でしたことを見てみよう。

要するに別れたいということだ。新しいボーイ・フレンドができたのだ。僕は首を振って煙草を六本吸い、外に出て缶ビールを飲み、部屋に戻ってまた煙草を吸った。それから机の上にある

HBの長い鉛筆の軸を二本折った。べつに腹を立てたわけじゃない。何をすればいいのかよくわからなかっただけだ。

「彼女」の手紙を読んだ直後の反応である。「彼女」が突き付けている現実に対する意味のある行動は何ひとつ起こしてはいない。「首を振って」、現実から逃れようとしているだけである。無意識的な、無意味な行動に走っているだけなのだ。「何をすればいいのかよくわからなかっただけ」というのは、「僕」における真実であっただろうが、「彼女」が突き付けている現実に対処するすべを立ち止まって考えようとしなかったことは確かなのである。いや、「彼女」が突き付けている「僕」の心の核心部に向き合うことから逃れているのだと言うべきであろう。

「要するに別れたいということだ」という総合的判断は間違っていないだろう。しかし、「新しいボーイ・フレンドができたのだ」という判断は、どこから出てきたのであるうか。「僕」が引用する範囲での「彼女」の手紙のどこにそれを示唆する事柄が書かれていたというのであろうか。「新しいボーイ・フレンドができたのだ」という判断を下す心の働きは、「性格の問題」であり、「たぶんプライドの問題」であるはずの、芝生をきちんと刈ることを、「ただ単に芝生を刈るのが好きだったのだ」とすり替える心理機制と似ているであろう。「彼女」が突き付けている「僕」の心の核心部に向き合いたくないから、問題をすり替えているのである。「新しいボーイ・フレンドができたのだ」と思うほうが楽なのである。

「新しいボーイ・フレンドができたのだ」と考える「僕」には、別の照明を当てることが出来るで

あろう。「彼女」が「僕」と別れたいというのは、新しい恋人ができたからなのだ、という短絡的な思考。恋人をモノ化した感性。モノのように取り替えられる恋人。ご飯をいつも食べていなければならぬように、衣服をいつも着ていなければならぬように、恋人がいつでもいるはずだという思考。恋人をモノ化する心性には、恋愛を性欲に還元してしまう心性が潜んではいないであろうか。無意識的な促し、「べつにたいした理由はない」、へただ単に、生じてしまう性欲を満たすためのモノ（肉体的存在）としての恋人との関係、「僕」にとつての恋愛の意味はその範囲を大きくは出ていなかったであろう。芝刈りのアルバイトで貯めた「夏に恋人とどこかに旅行する資金」、「彼女」と別れてそれが不要になった「僕」。

僕は別れの手紙を受けとつてから一週間くらい、その金の使いみちをあれこれと考えてみた。

というより、金の使いみちくらいしか考えるべきことはなかった。なんだかわけのわからない一週間だった。僕のペニスは他人のペニスみたいに見えた。誰かが僕の知らない誰かが彼女の小さな乳首をそつと嘸んでいるのだ。なんだかすごく変な気持ちだ。

「彼女」の手紙を受け取つた「僕」が、「彼女」に対して何も働き掛けないでいれば、確かに、「彼女」との関係は終わり、別れたことになるのかも知れない。しかし、「僕」が働き掛ければ、「彼女」は別れないかも知れないというのもまた確かであろう。「彼女」の手紙に直接応えない限り、関係は終わったとは言えないのである。「彼女」に向かつて果たすべき緊急課題、そこから逃げるための逃げ口上が、「金の使いみちくらいしか考えるべきことはなかった」であろうが、この逃げ口上には、



「彼女」との関係の希薄さも垣間見えるであろう。関係の希薄さ。「彼女」の存在を肉体的存在（モノ）としてしか感じられないのだ。対象を失った「僕」のペニスへの違和感、実感の喪失。「彼女」との恋愛の関係性抜きに、「僕」のペニス（「僕」の無意識的な性欲）は、「彼女」の肉体を求めているのである。「新しいボーイ・フレンド」（「僕」の想像が勝手に存在させているだけであるが）との「彼女」の恋愛の関係性を、「彼女の小さな乳首をそつと噛んでいる」としか捉えられない「僕」。「僕」の恋愛の意味を投影しているのである。「僕」にとつての「彼女」の必要理由の大部分は、ペニスを使用すること、「彼女の小さな乳首をそつと噛むことであつたのではなからうか。「彼女」との生きた人間関係を求めないままに、「僕」のペニス（無意識的欲動）が「彼女」の肉体を求めていることは、へ午後最後の芝生へ刈りのさなかに、「何度かペニスが勃起」していることで分かるであろう。

僕が彼女をほんとうに好きだつたのかどうか、これは今となつてはよくわからない。思い出すことはできるが、わからないのだ。そういうことつて、ある。僕は彼女と食事するのが好きだつたし、彼女が一枚ずつ服を脱いでいくのを見るのが好きだつたし、彼女のやわらかいワギナの中にいるのも好きだつた。セックスのあと、彼女が僕の胸に顔を付けてしゃべったり眠ったりするのを眺めるのも好きだつた。でも、それだけだ。それから先のことなんて何ひとつわからない。芝刈りの「なるべく遠くの仕事をとる」心のかたちとはほぼ同じ心のかたちである。「べつにたいした理由はない」、へただ単にへへするのが好きなのだ。自分の世界だけで完結すること、モノが対象となることにおいては、それで不都合はないであろう。しかし、生きた他者との関係においてはど